

いまなお脅かされる生きとし生けるものの生命 人間だけじゃない!



8.22 被ばく70年・ふくしま映画祭

8月22日(土) 会場:文京区男女平等センター

ヒロシマ・ナガサキ原爆被ばく70年、チェルノブイリ原発被ばく29年
福島原発被ばく4年半、放射線被ばくを学習する会2周年

第1部 13:00 開場

- 映画「福島生きものの記録シリーズ3～拡散」
群像舎 2015年製作・岩崎雅典監督
- お話「決死救命、団結!希望の牧場」吉澤正巳さん
- 岩崎監督と吉澤さんの対談
- 福島裁判・母親原告からの訴え



第2部 18:00 開場

- 映画「ヒロシマ・ナガサキ 核戦争のもたらすもの」
広島市・長崎市企画、岩波映画制作、早川正美監督、1982年文部省特選
- 映画「チェルノブイリ 28年目の子どもたち 2～いのちと健康をまもる現場から」2015年 OurPlanet TV 製作、白石草監督

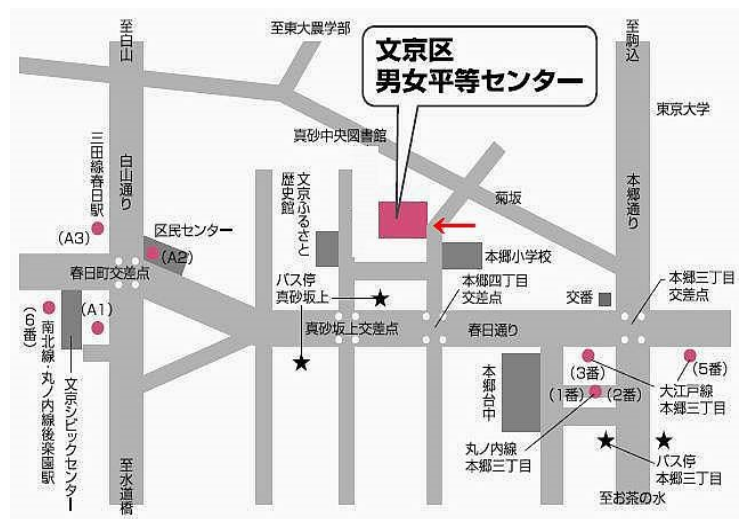
- 早川監督と白石監督の対談

【資料代】

- 第1部 成人 800円 高校・大学生 400円
- 第2部 成人 500円 高校・大学生 250円
- 1、2部通し 成人 1200円 高校・大学生 600円
いずれも中学生以下無料

【お申込み】

1. 映画祭実行委員がチケットを取扱っています。
2. 「こくちーず」からも申し込めます。
詳細は <http://goo.gl/VVjPPx> をご覧ください。
3. 中学生以下は無料ですが席の確保のために申込みをしてください。
4. 定員(昼・夜とも 150席)になり次第締切ります。



【主催】放射線被ばくを学習する会 (Email) anti-hibaku@ab.auone-net.jp (ふくしま映画祭・宮本 090-2671-3609)

【協賛】群像舎、希望の牧場、OurPlanet TV、岩波映像、月1原発映画の会

【内容紹介】



第1部映画「福島生きものの記録 シリーズ3～拡散」

群像舎 2015年作品・岩崎雅典監督・91分

2011年3月福島第一原発事故は大量の放射性物質を大気中に放出した。それは風に運ばれ東に北に、西に南へと流れた。拡散した放射性物質は、街を汚し、田畑を汚し、そして川や森も汚した。“生きとし生けるものたち”事故4年目の報告。

40年近く動物ドキュメントを撮り続けてきた岩崎監督が、毎年の報告を約束するかのように作品を発表した。(事故後2年目の報告「シリーズ1～被曝」、3年目の報告「シリーズ2～異変」)に続く第3作)

見つめ続けている動物と環境＝ニホンザル、ツバメ、コイ、ヒメマス、アカネズミ、モグラ、タヌキ、キツネ、イノシシ、イノブタ、中禅寺湖、霞ヶ浦、黒い物質(シアロバクテリア)、決死救命！放置牛300頭など。

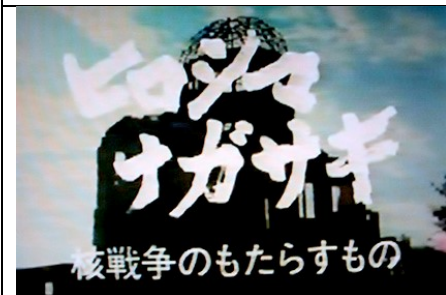


第1部お話「決死救命、団結！希望の牧場」吉澤正巳さん

エム牧場浪江農場は、原発から14kmの距離にあった。農場長であった吉澤正巳さんは、ホームセンターで買い物中に被災した。

「牛を残して逃げる気はまったくなかったね」。エム牧場に緊急の通信施設を置いた警察が避難した後も、吉澤さんは牧場に残り牛の面倒を見続けた。

警戒区域内には、牛約3500頭、豚約3万頭が飼育されていた。放置され、半数以上は餓死したと言われるが、野生化したものなど、警戒区域内の家畜は、所有農家の承諾を得たうえで殺処分という指示がでた。そのような中で、吉澤さんは殺処분을承諾せず、牛を守り続けてきた。「俺は牛飼いなんだ。牛を殺すわけにはいかない」。事故を生き抜いてきた貴重な証人として牛を生かし続けるために、吉澤さんは訴える。



第2部映画「ヒロシマ・ナガサキ 核戦争のもたらすもの」

企画／広島市・長崎市、製作／岩波映画 1982年作品・文部省特選 46分

広島・長崎の被爆者は口をそろえていう。「私たちが一番残念に思うことは原子爆弾が私たちの上に落とされた“あの時”のことではありません。現在に至ってもなお、核兵器がつくられていることです。」

核兵器が巨大化、高性能化した今日であればこそ、その事実を日本の全ての人に、世界の全ての人に、知ってもらう必要がある。広島市と長崎市がこの映画を企画した意図もそこにあった。

科学者たちの報告を集大成した書物「広島・長崎の原爆災害」(岩波書店)に基づき、原子爆弾被爆の総合像を描いた記録映画。

・・・国内科学者の1980年台前半における一致点がまとめられています。原子力発電所による被ばく、低線量被ばく、内部被ばくという問題は、まだ論争のまな板に登っていません。

チェルノブイリ 28年目の子どもたち

いのちと健康を守る現場から



第2部映画「チェルノブイリ 28年目の子どもたち 2～いのちと健康をまもる現場から」 OurPlanet TV 2015年作品・白石草監督 33分

1年前の前作「チェルノブイリ28年目の子どもたち—低線量被ばくの現場から」に引続き、2015年映像報告のテーマは、子どもたちの健康を守る仕組み。ウクライナでは、チェルノブイリ事故から28年経った今も「チェルノブイリ法」によって、年間0.5ミリシーベルトを超える地域の住民には、今もさまざまな支援策が講じられています。

中でも政府が重視しているのが、保養と健診。ウクライナ政府は2013年12月に、社会政策省に新たに「保養庁」を設置し、手厚い保養政策を展開しています。また子どもたちへの健診も、保健省が詳細なガイドラインを作成して実施。子どもたちの体調の把握に努めています。毎年、子どもの半数が参加する保養のシステムや、きめこまやかな健康診断などについて取材しました。